聴覚障害者及び視覚障害者のための大学

筑波技術大学ニュース

第 34 号　発行日：2015 年 5 月　www.tsukuba-tech.ac.jp

国立大学法人
筑波技術大学

筑波技術大学では、筑波技術大学ニュースのメール配信を行っております。ご希望の方は、件名を「筑波技術大学メール配信希望」、本文に、「団体名（個人名）」をご記入の上、筑波技術大学総務課企画・広報係（kouhou@ad.tsukuba-tech.ac.jp）までメールにてご連絡ください。

◆大越新学長就任挨拶
◆村上前学長退任の挨拶
◆平成 27 年度入学式
◆平成 26 年度学位記授与式

大越教夫学長就任のご挨拶

4月1日、筑波技術大学3代学長（開学から6代目）に就任致しました大越教夫でございます。これまでの本学に対する格別なご支援、ご協力に心より感謝申し上げます。この度の学長就任にあたり職責の重大さを日一日と痛感している毎日ですが、皆様のご期待に応えられますよう、最善の努力を尽くしたいと思っております。

本学は、28年前、筑波技術短期大学として開設されて以来、2005年に4年制大学の筑波技術大学となり、2010年には大学院技術科学研究科が開設され、さらに2014年に「情報アクセシビリティ専攻」が設置され、大学院が完成しました。ご周知のように、日本でただ一つの聴覚障害者と視覚障害者のための高等教育機関として、「幅広い教養と専門的な技術とを有する専門職業人を育成し、両障害者のより良い社会自立を促進すること」、「障害の特性に即した教育方法を開発し、障害者教育全般の向上に貢献する」を目的としております。その目的に沿うように、大学、大学院、短期大学、あわせて1,739名の卒業（修了）生を輩出し、毎年きわめて高い就職率を達成するなど、社会参画・貢献できる人材育成という点で大いに成果を上げてきました。また、全国の障害者高等教育の共同利用拠点として、他大学に在籍する障害のある学生の支援活動を行うなどにも着実な実績を積み上げ、「障害者教育のネットワークの中枢を担う大学」としての機能も育ててきました。

これから本学の運営を行うにあたり、「大学改革プラン」、「ミッションの再定義」、「機能強化の方向性」という3つの最重要キーワードに、方向性を定めなければなりません。まずは、国立大学の三分類の中で、本学は「特定分野で世界ないし全国的な教育研究を推進する大学」を目指すことになります。以下に、本学が直ちに取り組まなければならない重点事項について記述します。

第一のポイントは、「大学を発展させるために学長がリーダーシップを発揮できる学内体制作り」をあげます。現在、第三期に向け中期目標・中期計画を作成していますが、将来の企画戦略を立案するために学長の補佐体制をこれまで以上に強化しました。本学は、小規模大学のため特定の役職に業務が集中する傾向があります。内からの幅広い意見を集約し、より効率よい学内運営体制を実行するため、5名の特命学長補佐（企画・評価、広報、研究推進、保健科学改革、バリアフリーの各担当）を配置しました。特に、バリアフリー担当は、平成28年度4月に障害者差別解消法が施行されるにあたり、本学が高等教育機関における「障害者に対する合理的配慮のためのガイドライン」の実行可能なモデルを先行して作成し、学内で実施体制を整備、検証するための担当ですが、全国の大学や教育機関のガイドラインの「魁」となるような成果を期待しております。

第二のポイントは、「教育と人材育成の筑波技術大学」であります。教育に関して、本学ではこれまで他大学では真似ができないほどの少人数制教育、学生の特性に応じた情報保障、教育支援を実施してきました。教育に絶対的な到達点はありません。一つの目標に到達すれば、次の目標を目指すのが大学としてのミッションだと考えおります。「アクティブ・ラーニング」の推進、グローバル化への対応のための「国際交流・留学生センター」の新設、図書館に「ラーニング・コモンズ」の設置、社会人の「学び直しのための編入試験」の拡大等、これまで以上に教育体制・環境の整備を進めたいと思います。さらに、学習面だけでなく本学の特色を生かした活動、特に東京オリンピック・パラリンピックに向けた障害者スポーツの推進に関連した事業を展開したいと考えています。本学学生および卒業生から一人でも多くの「パラリンピックやデフリンピックの日本代表」を送り出したいと考えております。

第三のポイントは、「入学生の確保ための学部改革」であります。これまで、各々の学部の魅力作り、教育の質の改善、学生支援の拡大、入試方法の改善、広報活動などを実施してきましたが、入学者の確保には未だ十分とは言えません。世間では、「大学全入時代」を経て、「半数の大学が定員割れ」に突入し、さらに2018年問題、「淘汰の時代」、「大学戦国時代」が現実に迫っています。もう一度原点に返って、「障害のある学生が何を学びたいのか、社会が求めているのはどの分野か、何を学べば社会に参画し、リーダーとして社会貢献ができる人材になれるのか」を議論し、直ちに入学者確保のための改革を実行したいと考えております。特に、保健科学部においては新たな学問分野や職域拡大への挑戦も視野に入れ、春日キャンパスの抜本的な改革のスィッチをONにしたいと考えております。是非、皆様からは貴重なご意見をいただけましたら幸いです。

第四のポイントは、「大学院機能の充実」です。修士課程が一応の完成をみたわけですが、今後の展望を考えると、海外からの「留学生の受け入れ拡大」や「理療科教員養成課程の設置」に向けた取り組みなども行い、もう一歩大学院機能を充実させたいと考えています。特に、昨年開設した情報アクセシビリティ専攻に関しては、新しい学問分野である「情報保障学」の教育・研究をさらに推進する必要があり、現在の修士課程だけでなく、保健科学専攻等も含めて「博士課程の設置」も視野に入れた活動をしたいと思っています。

第五のポイントは、「国からの運営費交付金の削減に対する対策」です。本学のように規模の小さい大学、人件費の比率の高い大学は、経費削減にも限界があります。そこで次の定番のワードは外部資金の獲得となりますが、このところの経済事情や学術分野を考慮するとそんなに容易いことではありません。しかし、明るい話題として本学では、今年9月に東西医学統合医療センターの「新棟（西棟）」が完成します。その準備段階として、この4月から高等教育機関の医療施設としては初めて「手技療法外来」が試験的稼働しました。「新棟（西棟）」完成後には、「手技療法外来」が本格的に稼働し、リハビリテーション部門も拡大しますので、診療所収入の増加が期待できます。まずは、「できることから始める」を合言葉に、科研費等の公的資金や外部資金への申請の推進など、寄付金等による研究助成の拡大、産学官連携など、地道な個々の教員の努力に対して学内で応援することが重要と考えております。

聴覚・視覚障害者のための高等教育に関する我が国の中核機関として、多様化する社会的ニーズにも対応できるよう教育力と研究力をさらに高め、「障害者のための最高の大学」、「社会と障害者から頼りにされる大学」を目指し、より一層発展させたいと考えております。ご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

国立大学法人　筑波技術大学長　大越 教夫

村上芳則学長任期満了退職に伴う挨拶

去る３月末日をもって、６年間務めさせて頂いた学長の任を退き、25年間勤めさせて頂いた筑波技術大学を退職いたしました。この間、ご指導、ご鞭撻頂きました皆様にお礼申し上げます。

振り返ってみますと、この６年の間に運営費交付金の削減、そして東日本大震災などがありましたが、「大学院の設置」をはじめ、「教職課程の開設」や附属東西医学統合医療センターの「リハビリテーション科の開設」「大学基金の設立」、紫峰会館の改修による「学生支援棟の整備」等々に続き、昨年は「情報保障支援係の整備」、そして大学院「情報アクセシビリティ専攻の開設」を実現でき、お陰様で聴覚・視覚障害者のための大学として、充実を図ることができました。

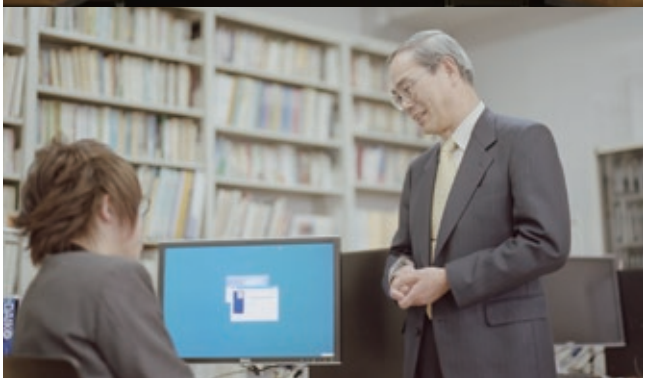
しかし、教育と研究の内容のさらなる充実、質的向上に関しては、その方策として、「アカデミック・アドバイザー制」や「GPA 制」「修学ポートフォリオ」、科研費の報奨金制度を導入したものの、まだまだ未達成であり、為し得なかったこととして残念に、また申し訳なく思っています。

今現在、本学だけではなく、日本の大学は予算的にも厳しい状況の中で、改革実行プランへの対応、機能強化を進めています。その状況の中で、特に、本学は工事進行中の「医療センターの増築」を活かすためにも、「教育課程・学生定員の見直し」「理療科教員養成課程の開設」などにより、保健科学部の改革、機能強化を図るとともに、「聴覚・視覚障害者の高等教育の分野で世界的な教育研究を目指すとともに、全国的な教育研究拠点としての機能を果たす大学」として、さらなる機能強化を図ることが期待されています。

また、来年４月の障害者差別解消法の施行により、障害者に対する合理的配慮が義務化されますが、本学の資源を最大限に活用し、学内のみならず、他大学への支援の充実に期待が寄せられています。

筑波技術大学が今後も卒業生が誇りを持って「技大卒です」と名乗れる大学として発展するとともに、聴覚・視覚障害者の高等教育に関する我が国のセンターとしての役割を担う大学、さらにはアジアの、そして世界のセンターとして成長されることに夢を託し、退任の挨拶とします。

国立大学法人　筑波技術大学　第２代学長　村上　芳則



平成 27 年度筑波技術大学入学式を挙行

4 月 6 日、本学天久保キャンパス講堂において、平成 27 年度筑波技術大学入学式を挙行いたしました。

入学式では、学部 87 名（産業技術学部 51 名、保健科学部 36 名）及び大学院技術科学研究科 9 名（産業技術学専攻 2 名、保健科学専攻 4 名、情報アクセシビリティ専攻 3 名）の入学が許可され、大越学長から「学びは、自らを鍛えることです。今、社会から求められている『考え抜く力』や『基礎力』は、自らが努力することによってのみ獲得できる力です。時には困難に耐え、地道に努力を続けていくことが必要となります。決して、楽なことではありません。是非、しっかりと学修し、未知の問題、難しい問題を解決できる『考え抜く力』を養い、社会人としての『基礎力』を身につけて下さい。」などの式辞の後、両学部入学生代表による入学宣誓がありました。

引き続き、来賓のつくば市副市長の岡田久司氏、一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長の石野富志三郎氏、元筑波技術短期大学長の西條一止氏からそれぞれ祝辞がありました。

（総務課総務係）

平成 26 年度学位記授与式を挙行

3 月 20 日、本学天久保キャンパス講堂において、平成 26 年度筑波技術大学学位記授与式を挙行いたしました。

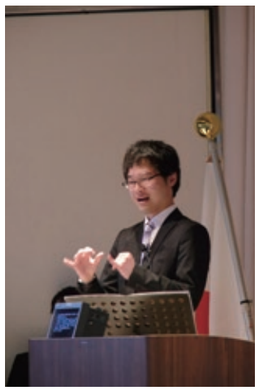
今回、学位記を授与されたのは、産業技術学部 44 名、保健科学部 24 名、合わせて 68 名の学部卒業生及び大学院修士課程技術科学研究科産業技術学専攻 4 名、同研究科保健科学専攻 2 名、合わせて 6 名の修了生でした。

学位記授与式では、村上学長から卒業生及び修了生一人ひとりに学位記が手渡された後、「これからの長い人生の中で岐路に立ち、重大な選択を迫られることが必ずあります。その時、進む道を自らが選択できるのであれば、邪心ではなく、自分自身の良心に従って考え、決断してください。しかしながら、他の人が決めた結果に従わなければならない場合が多いのも事実です。その時に最も大切なことは、自らが望み選択した結果なのか、自らの望みに反して、他の人が決めた結果なのかに関わりなく、後々「この選択で良かったのだ」、「この道に進んで良かったのだ」と思えるように努力することです。」などと学長の式辞がありました。

引き続き、つくば市副市長の細田市郎氏、一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長の石野富志三郎氏及び元筑波技術短期大学長の西條一止氏からそれぞれ祝辞がありました。

これに対し、卒業生及び修了生を代表して、それぞれ謝辞が述べられました。

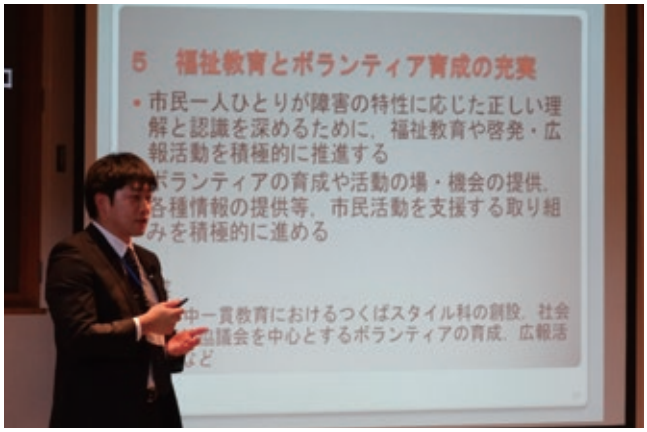
（総務課総務係）



平成 26 年度地域連携に関する講演会を開催

2 月 19 日、天久保キャンパス講堂において、学術・社会貢献推進委員会主催の平成 26 年度地域連携に関する講演会を、本学教職員・学生、一般の方々を含む約 40 名の参加を得て開催しました。今回は、つくば市福祉部障害福祉課の袴田修由氏を講師に迎え、「つくば市の障害者対応施策の現状と、より良いつくば市を目指して」と題し、つくば市の障害者対応施策について説明いただき、学生より寄せられた意見に対しての回答、つくば市の施策が今後目指すところについて、分かりやすく解説していただきました。

（学術・社会貢献推進委員会　石原 保志）



講演の様子

質疑応答の様子

「障害者高等教育拠点事業　FD/SD 研修会」を実施

2 月 6 日、春日キャンパスにおいて「FD/SD 研修会～合理的配慮の実施に向けた拠点事業の機能と役割～」を開催しました。これは、教育関係共同利用拠点（文部科学省認定）である障害者高等教育研究支援センターが、「障害者高等教育拠点」事業の一環として開催したものです。

当日は、全国の大学や特別支援学校等 42 校・機関から 48 名の参加者がありました。

本研修会では、プログラムの実施をとおして、高等教育機関における障害学生支援での本事業の活用方法の提案や、合理的配慮の実施に向けた指導・支援のあり方について議論を行いました。事例報告では、本事業を活用した 3 大学の支援担当者から報告がありました。参加者からは多くの質問が寄せられ、活発な意見交換がなされました。

また、取組担当者によるパネルディスカッションでは、各取組の実績を報告するとともに、今後の共同利用拠点事業の果たすべき役割について提案がなされました。プログラムの前後には、パネル展示・支援機器室見学も行われました。

（障害者高等教育研究支援センター　須藤 正彦）

会場内の様子

パネルディスカッションの様子

● 聴覚障害者の就労に関する産学官連携シンポジウムを開催

2月12日、天久保キャンパス講堂において、「大学等を卒業した聴覚障害者の就労に関する産学官連携シンポジウム」を開催しました。

本シンポジウムは、企業の人事・採用担当者や本学学生・教職員を対象とし、大卒聴覚障害者の就労時において起こる課題の改善策を探ることを目的としています。今回は行政の立場の方から1名、企業関係の方から本学卒業生1名を講師にお招きし、講演とディスカッションを行いました。企業関係者25名（19社）、本学学生35名、本学教職員11名、合わせて71名の参加がありました。後半に行われたディスカッションでは、学生からだけでなく企業の方からも質疑応答や意見交換が行われました。

シンポジウムの内容は、以下の通りです。

●開会・趣旨説明・講師紹介

●講演1「就労に備えて学生時代に準備すべきこと」

緒方沙織氏（東芝ソリューション株式会社、本学卒業生）

●講演2「障害者就労の現状と課題」

岡田高宣氏（ハローワーク品川　就職支援ナビゲーター）

●ディスカッション「学ぶ立場から働く立場へ」他

司会進行・石原保志（聴覚障害系就職委員会委員長）

（聴覚障害系支援課学生係）

石原聴覚障害系就職委員会委員長のあいさつ

ディスカッションの様子

●「第3回学生のための講演会」を開催

1月14日、天久保キャンパス講堂において、第3回学生のための講演会「おとなの薬物乱用防止教室」を開催しました。

茨城県薬物乱用防止指導員で薬剤師の菅原俊先生を講師にお招きし、実際に起きた薬物乱用事件などの事例に基づき、薬物乱用の危険性や乱用防止のための基礎知識について講演をいただきました。この講演会には、天久保キャンパスの学生約60名に加え、約20名の教職員が参加しました。

講演後の質疑応答では、学生から積極的に質問がありました。学生のみならず教職員にとっても非常に学ぶところの多い内容でした。

この講演会は天久保キャンパスの聴覚障害系寄宿舎学生生活委員会が主催し、今後も防犯・薬物など学生が学んでおくべきテーマについて、それぞれの分野の専門の講師をお招きして開催する予定です。

（聴覚障害系寄宿舎学生生活委員会）

講演の様子

タイのマヒドール大学ラチャスダカレッジと大学間協定調印

2月12日に16番目の協定機関となるマヒドール大学との協定が調印されました。ラチャスダカレッジはタイの王室が関わってマヒドール大学内に1992年に創設され、聴覚や視覚に障害のある学生を受け入れてきました。本学へはタイ王室のシリントン王女が2006年に来学されています。また、本学主催の国際シンポジウムにてラチャスダカレッジ学部長に講演いただくなど教員の相互交流がこれまでにも積極的に行われてきました。

昨秋、ラチャスダカレッジの2名の学生を受け入れたことが今回の協定調印を加速させました。

（障害者高等教育研究支援センター　須藤 正彦）

調印する村上学長とラチャスダカレッジの Cheausuwantavee 学部長

韓国ナザレ大学学生が本学「国際教育短期受け入れプログラム」に参加

1月13日から1月21日の9日間、韓国ナザレ大学の学生2名が、「国際教育短期受入プログラム」に参加し、無事に全ての課程を修了しました。プログラムは、参加学生の専門に合わせ、情報科学コースと総合デザイン学コースに分かれて実施されました。

本学開設の授業を本学の学生と共に受講した他、プログラムのために特別に開講された授業で、日本語や日本手話の体験学習を行いました。いずれの授業でも、参加した学生は熱心に学習していました。プログラムの参加にあたっては、（独）日本学生支援機構および筑波技術大学基金の支援を受けました。

（聴覚障害系支援課教育支援・大学院係）

修了証書を受け取った参加学生と学長の様子

平成 26 年度海外研修事業報告会 (欧州・米国アイオワ大、中国) を実施

2 月 16 日、天久保キャンパス大会議室において、平成 26 年度に実施した海外研修事業のうち欧州研修、米国アイオワ大学研修、中国研修について、派遣学生による報告会が開催されました。報告会には教員と学生合わせて約 30 名が参加し、引率教員の話に引き続き各派遣学生からの報告がありました。

欧州研修（平成 26 年 8 月 2 日～ 13 日）については、保健科学部情報システム学科・2 年の森山夏気さんから、欧州各国から視覚障害学生が集まり共同生活を通して相互理解を深めるサマーキャンプ「International Camp on Communication and Computers（ICC）」の様子が報告されました。今回のサマーキャンプは、ラトビア共和国のリガで開催され、期間中に色々なテーマのワークショップに参加し、活きた英語の重要性を実感するなど、充実した 10 日間のスケジュールをこなしたようです。

米国アイオワ大学研修（平成 26 年 9 月 13 日～ 23 日）については、保健科学部保健学科鍼灸学専攻・2 年生の杉夏彦くんと、保健科学部保健学科理学療法学専攻・2 年の田場夢乃さんから報告があり、研修をとおして、現地学生のまじめさや積極性に感動したこと、国による医療現場の違いを肌で感じたこと、などが述べられました。現地の学生との交流の中で積極性を見習うべきことに気付き、学習意欲が増した等、貴重な体験ができ大きなプラスになったようです。

中国研修（平成 26 年 9 月 14 日～ 24 日）については、保健科学部保健学科鍼灸学専攻・3 年の水上次郎くんから報告がありました。研修では、訪問先の長春大学や天津理工大学などで、それぞれの専門に合わせた研修プログラムを受け、日本との情報保障体制や就職実態、学生の積極性の違いを肌で体感したようです。

また、各報告後の質疑応答では、研修に興味を持って参加した学生などから、研修前の準備内容や研修前後の意識の違いなどについて、活発な質疑応答が行われました。

（国際交流委員会副委員長　岡本 健）

研修会の様子

「平成 26 年度 専門テーマ別障害学生支援セミナー【6】」を開催

12 月 13 日、筑波大学筑波キャンパスにて、日本学生支援機構、筑波大学、筑波技術大学による「平成 26 年度 専門テーマ別障害学生支援セミナー【6】」を開催しました。

本セミナーは障害学生支援に関する情報を広く提供することにより、全国の高等教育機関の教職員・学生・企業関係者などが障害学生に対する支援の更なる理解を深め、障害学生支援の質の向上に資することを目的としており、毎年、筑波大学と共催している「筑波障害学生支援研究会」も兼ねています。

今回は、全国各地から 160 人が参加しました。支援体制の向上に焦点を当て、総合大学、小規模大学など、独自の特徴を持つ 7 大学（筑波大学、筑波技術大学、京都大学、広島女学院大学、長崎大学、明治学院大学、立教大学）から、それぞれの支援体制の現状と課題の報告がありました。パネルディスカッションでは、講演者全員が登壇し、参加者からの質問に答えながら、今後の各大学における支援体制構築のために議論を深めました。

（障害者高等教育研究支援センター 宮城 愛美）

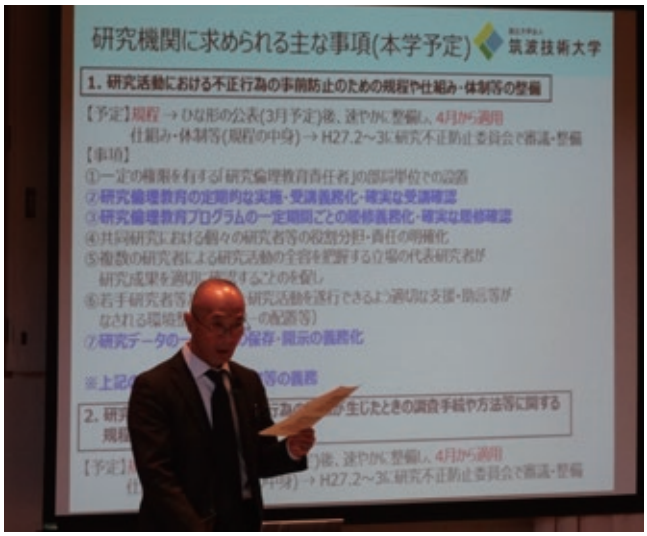
パネルディスカッションの様子

平成 26 年度研究不正防止講演会を開催

3 月 2 日、天久保キャンパス講堂において、学術・社会貢献推進委員会主催の「平成 26 年度研究活動における不正行為、研究費の不正使用に関する講演会」を開催しました。この講演会は、平成 26 年 8 月に文部科学省が新たに公表した「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」（以下、新ガイドライン）が、平成 27 年 4 月から適用されることを受けて、本学に所属する研究者、将来研究者を目指す人材（学生、院生含む）や研究支援人材（事務系職員含む）など広く研究活動に関わる者の研究倫理規範意識のさらなる向上を目的に、約 70 名の参加を得て開催したものです。

村上芳則学長による開会挨拶の後、石原保志副学長から新ガイドラインの概要と本学の取組み、特に教職員に課すこととなる義務について説明がありました。続いて、独立行政法人科学技術振興機構（JST）研究倫理室の安藤利夫参事役と本山功幸室長、高柳元雄副調査役から、平成 26 年 2 月に大幅に改正された「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」と新ガイドラインに沿った JST の取組みなどについてご講演いただきました。

（学術・社会貢献推進委員会　石原 保志）



講演する石原副学長

会場の様子

東西医学統合医療センターで防災訓練を実施

東西医学統合医療センターでは、1月28日の診療後に防災訓練を実施しました。

東日本大震災は診療中に発生しましたが、患者やスタッフにケガ等の被害はありませんでした。当センターではお灸による治療も行っていることから火災につながることも考えられます。

今回の訓練は、地震の発生後、施術室から出火するという想定で行いました。終了後は、ミーティングを開催して問題点や改善点を検討し、最後に消火器の設置場所や非常口の確認も行いました。患者様が安心して利用できる医療施設を目指して、今後も取り組んでいきたいと考えています。

（東西医学統合医療センター　櫻庭 陽）

防災訓練の様子

つくば科学フェスティバル標語応募者への記念キーホルダーを作成

つくば市で開催された、つくば科学フェスティバルの標語応募記念のキーホルダーが完成し、つくば市の教育委員会の担当者に手渡されました。

子供達に科学の楽しさを伝える科学フェスティバルの標語を応募し、選考された小中学生の記念品として製作したものです。キーホルダーは科学フェスティバルのポスターのイメージを基にしてコンピュータで作図し、この図面データによりレーザ加工機を制御してレーザ光を照射して図柄を刻み、板から切り抜いて作ったアクリル製のものです。産業情報学科システム工学系の機械工学領域の学生達が毎年社会貢献として製作を手伝っており、つくば市より感謝されている恒例の取り組みです。手渡されたキーホルダーは教育委員会から各学校を通して記念品として配られました。

（産業技術学部産業情報学科　荒木 勉）

キーホルダーを担当者に手渡す様子とキーホルダー

平成 26 年度産業技術学部学生の表彰を実施

2 月 13 日 、大会議室において、平成 26 年度産業技術学部長賞の表彰式が行われました。

産業技術学部長賞は、学業・課外活動等の成果が特に優れていると認められる者、本学部の名誉を著しく高めたと認められる者に対して贈られるものです。

このたび、産業技術学部長賞を受賞したのは次の 9 名です。受賞者には内藤産業技術学部長から表彰状と記念品が授与されました。

○第 3 回アジア太平洋ろう者サッカー選手権大会 3 位
産業情報学科 3 年次　大西　諒
産業情報学科 3 年次　藤村厚史
○ つくばアプリアイデアコンテスト最優秀賞
総合デザイン学科 3 年次　岩渕亜依
総合デザイン学科 3 年次　猪熊桃子
総合デザイン学科 3 年次　鹿森優香
総合デザイン学科 3 年次　吉川萌音
○ ろうあ連盟 70 周年記念碑デザインコンペ受賞
総合デザイン学科 4 年次　小國雅治
総合デザイン学科 2 年次　町田陽伽
総合デザイン学科 2 年次　日影舘美樹

また、3 月 20 日 、大学会館 1 階食堂において、卒業生に対する平成 26 年度産業技術学部長賞の表彰式が行われました。

○学業
産業情報学科 4 年次　上地伶奈
産業情報学科 4 年次　田中誉起
産業情報学科 4 年次　辰巳雅哉
総合デザイン学科 4 年次　山田航平
○ 第 3 回アジア太平洋ろう者サッカー選手権大会 3 位
産業情報学科 4 年次　吉野勇樹

（聴覚障害系支援課学生係）

内藤産業技術学部長と受賞者の集合写真

平成 26 年度筑波技術大学点訳ネットワーク研修会を開催

3 月 6 日、東京都中央区のアットビジネスセンター東京駅八重洲通店にて筑波技術大学点訳ネットワークに参加する点訳者を対象とする 平成 26 年度研修会が開催されました。今回の研修会も、点字技能師、首都圏の点字図書館職員の皆様へもお知らせをさせていただき、75 名の方の参加を得て盛況に行われました。

社会福祉法人東京点字出版所の白井 康晴氏とテクノツール株式会社の大鐘 俊也氏を講師に招き、講演「統一英語点字のわが国への導入 － 点字教科書はどう変わるか？」と、講演「点字編集ソフトの今と未来 － 編集システム 6 や BESX の発展の方向性」をおこないました。視覚特別支援学校（盲学校）の英語教科書も「統一英語点字」が導入されるため、点訳者の皆様は熱心に話を聞いていました。また、「点字編集ソフトの今と未来」では、新しいバージョンでの BESX や編集機能の追加等について興味深い話がありました。年度末の忙しい時期にも関わらず、研修会に参加していただいた皆様に感謝申し上げます。

（視覚障害系支援課技術係　小野瀬 正美）

研修会場の様子

北海道高等聾学校との遠隔協調授業を実施

1月26日、北海道高等聾学校情報デザイン科の生徒と本学総合デザイン学科の学生とで「20年後の私の家」というコンセプトデザインについてテレビ会議システムを通して意見交換を行いました。

北海道高等聾の生徒が作成した図面について、本学学生が質問やコメントをし、プロの設計士にリアルタイムで図面を修正してもらいながら、どのようにデザインを改善していくかを議論しました。

「この部屋の収納は1つでいいんじゃないか？」「お母さんの動線を考えたら？」「北海道は雪が降るから傾斜屋根にしたほうがいいのでは？」など、同席した教員も驚くぐらいのたくさんの有益な意見が交わされました。

今回、テレビ会議システムを通じて初めて顔を合わせた生徒・学生同士が、1つのテーマに対して意見を出し合えるのは、彼らが普段の学びの中で検討の基礎を培ってきたおかげでしょう。

今回の取り組みには高大連携プロジェクトで構築された多地点共有通信システムを用い、各地の様子、図面表示PCの画面に加えて、文字通訳や手話通訳といった情報保障の映像もやりとりをしています。

今後も、全国のろう学校との遠隔協調授業の取り組みをしていきたいと思います。「こんなことがやりたい！」「こんなことはできますか？」など、お気軽にお問い合わせいただければ幸いです。

（産業技術学部総合デザイン学科　長島 一道、本間 巌）

上：遠隔協調授業の様子、下：北海道高等聾学校会場の様子

卒業生・社会人を対象とした出張講座を開催

3月8日、東京のオフィス東京（中央区京橋）にて「応用情報技術者試験対策講座」を開催しました。IT専門の外部講師をお招きして、試験でよく出題されるIPアドレス、ルーティングといったネットワーク関連の話題をとりあげ、講義と試験問題を使った演習を行いました。大学での通常の講義とは異なり、資格試験に必要な「問題を早く解くためのテクニック」や「出題の傾向と対策」も紹介され、より実践的な内容の講座となりました。

本講座ではインターネットを利用した遠隔文字通訳と、本学教員による手話サポートによって情報保障を実現しています。

（産業技術学部産業情報学科　河野 純大）

講座の様子

東西医学統合医療センター平成 26 年度第 2 回医療安全研修会を開催

1 月 26 日、東西医学統合医療センターでは講師に杉山良子先生をお迎えして平成 26 年度の第 2 回目となる医療安全研修会を開催しました。講師の杉山先生は、武蔵野赤十字病院で看護師長として勤務されるとともに専従医療安全管理者として現場における医療安全の最前線を経験され、現在はパラマウントベッド（株）の技術開発本部主席研究員として安全な医療用のベッド等の開発にも携わっておられます。講義は「医療安全 ―気づく力・見守る目を養うために」と題して行われ、長年取り組んでいらした医療安全に関わる内容をはじめ、ご自身の体験も含めて 2 時間にわたりお話ししていただきました。研修会の会場である春日キャンパス講堂には、当センターや保健管理センターから 33 名のスタッフが参加しました。医療現場における KYT（危険、予知、トレーニングの略）の先駆けでもある杉山先生のお話は大変わかりやすく、また、その実践方法についても具体的にご指導していただきました。東西医学統合医療センターでは、今後も安全に配慮しながら医療を提供できるよう、努力していきます。

（東西医学統合医療センター　櫻庭 陽）

研修会場の様子

沖縄ろう学校での遠隔交流支援、および英語交流支援を実施

2 月 12 日と 13 日、沖縄県立沖縄ろう学校の小学部から高等部の生徒と、埼玉県立坂戸ろう学校、大宮ろう学園、福島県立聾学校会津分校との遠隔交流支援を行いました。テレビ会議システムを使った交流では、初めはぎこちないやりとりだったものの、すぐに打ち解けて、どんどん画面に迫っていくような盛り上がりでした。十分な速度を持つネットワーク回線の確保や、安定したシステムが課題となりましたが、遠く離れた相手とのテレビ電話による交流が、もっと身近なものになるといいですね。

また、アメリカ人ろう者のペギー先生をお招きして、沖縄県立ろう学校の生徒たちとの英語交流を行いました。AKB48 の「恋するフォーチュンクッキー」のダンスでの歓迎を受けたり、ASL（アメリカ手話）と英語の学習をしたりと、生徒も先生も充実した時間を過ごすことができました。この取り組みは外国語活動の一環として行われましたが、異文化理解や英語を学んでいくきっかけになってくれればと思います。

高大連携プロジェクトの広報活動の一環として、これまでの取り組みの紹介とともに、3D プリンタで作った様々な教材をお見せしました。中高生は 3D のモデルを手に取って感動の声（手話も）あげてくれて、「シャープペンシルは作れますか？」「義肢を作ってるのを見たことがある！」など、ものづくりへの大きな期待をのぞかせてくれました。本当にものづくりをしようとした時に、いま学んでいることが本当に役に立つことでしょう。

高大連携プロジェクトでは生徒の皆さんだけでなく、ろう学校の先生方、生徒の親御さんたちのために、大学としてどのような教育資源の提供ができるかを考えていきたいと思います。「こういう教科で力を借りたい」「生徒たちにこんな経験をさせたい」といった声や要望をお気軽にお寄せください。

（産業技術学部産業情報学科
新井 孝昭、米山 文雄、塩野目 剛亮）

遠隔交流と英語交流の様子

受験生向けサイトに授業紹介記事を掲載

東京大学、京都大学など旧帝国大学と東京工業大学及び筑波大学を除く、都道府県を代表する国立大学工学系学部（54 学部）が運営する受験生向けのサイト「未来を創る工学 ～未来を創ろう！地球を救う科学技術を学ぼう！」の「授業紹介」欄に「快適さ･心地よさなどを測る「コミュニケーション科学」」を掲載しました。

この授業は産業技術学部産業情報学科情報科学専攻 3 年次生ならびに総合デザイン学科視覚伝達デザイン学領域 4 年次生を対象とした選択科目です。受講する学生たちはこの授業の中で、ぬいぐるみの触り心地の良さ、お菓子の食感・美味しさ、人間工学的なキーボードの使いやすさなど、数値化しにくい身近な題材をもとに様々な官能評価法（主観評価法）を具体的かつ体験的に学んでいます。

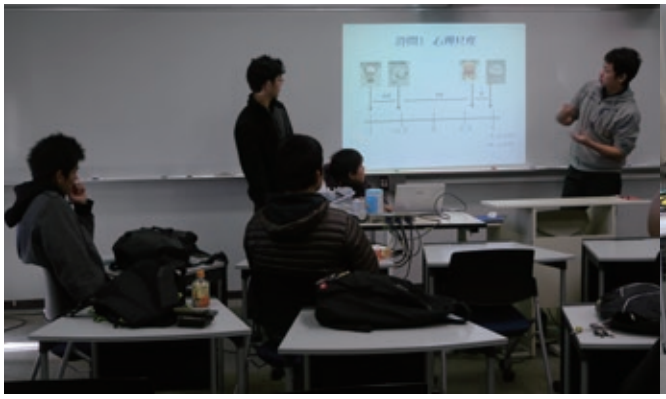
こうした経験が 4 年次の卒業研究で開発したシステムやソフトウェアなどの評価へと結びつき、ものづくりにおけるマーケティングの重要性とともに、計画・開発・評価という技術者として重要な技術開発の一連の流れを身に付けていきます。

この記事を通して、難しい専門的な知識を実践的に学んでいける本学の少人数教育の良さを感じとっていただければと思います。

産業技術学部では、今後もいろいろな情報を掲載していきます。どうぞ、ご期待ください。

掲 載 記 事：http://www.mirai-kougaku.jp/lesson/index.php#communication

（産業技術学部　内藤 一郎）



コミュニケーション科学の授業の様子

情報システム学科対象の第 2 回模擬面接会を実施

2 月 13 日、情報システム学科の 3 年生を対象とした第 2 回模擬面接会を実施しました。講師として元（株）テプコシステムズ人事管理担当部長、現 清水コンサルタント代表の清水俊勝氏をお招きし、「就職面接における気構えと心得について」というテーマでのお話を伺った後、学生ごとに模擬面接会を実施しました。まず、心を落ち着かせて面接に挑むこと、そして服装を整えること。質問に対しては結論を先に理由や説明は後で話すこと。視覚障害に伴いできることできないことの明確化や職場改善要望などの有無をまとめておくこと。さらには、エピソードを魅力的に語るためのポイントとして、エピソードと応募企業のマッチング、困難を乗り越えたときの体験、自分の考えや取り組み姿勢を伝えることの重要さなどのお話がありました。

また、個別学生への模擬面接指導も行われ、ドアから着座までの練習や実際の受け答えなど本番さながらの面接を行いました。学生は、他の学生が受けている指導の様子を同じ部屋で聴き、お互いが勉強できる体制を採り、よい点や改善点についての具体的なアドバイスをいただき、今後の就職活動に向けて有意義な模擬面接会となりました。

（保健科学部情報システム学科　嶋村 幸仁）

模擬面接会中の清水先生と学生

視覚障害切手展 を 埼玉県本庄市の児玉郵便局で開催

1月26日 から2月27日にかけて（土日祝日は休み）、保健科学部保健学科鍼灸学専攻の大沢准教授の視覚障害に関する切手コレクションを埼玉県本庄市の児玉郵便局において展示しました。今回は点字、白杖、盲導犬、視覚障害者の職業や偉人などの代表的な切手・郵便物（32か国54種類）を展示しました。江戸時代の、盲人の国学者塙保己一（はなわほきいち）の出身地である本庄市児玉において視覚障害に関する切手展が開催されることは意義深いと思われます。

（広報室）

展示されたパネル

全日本ろうあ連盟創立「記念碑」のデザインコンペで本学学生入賞

全日本ろうあ連盟創立70周年記念事業の一つである「記念碑」建立についてのデザインコンペで、審査の結果、本学総合デザイン学科の町田陽伽さん、日影舘美樹さん、小國雅治さんの3人で制作した作品が入賞しました。

記念碑は「歴史」「現在」「未来」を込めたデザインになっていて、今年6月に群馬県で開催する第63回全国ろうあ者大会の折に実施する除幕式で披露される予定です。

（保健科学部総合デザイン学科　長島 一道、山脇 博紀）

理学療法学専攻学生の評価実習報告会を開催

3月10日、理学療法学専攻3年生が、3週間の評価実習を終えて、この度、その成果を発表する実習報告会を開催しました。実習では、各施設1名ずつ、遠くは静岡の病院で、近くは筑波大学附属病院で現場の職員の指導の下で学びました。学生たちはそれぞれ成長し、次の目標に向けての誓いをあらたにいたしました。

（保健科学部保健学科理学療法学専攻　三浦 美佐）

報告会の様子

秋葉原駅サインボードのデザインを一新し掲出場所を移動

本学では、我が国唯一の聴覚障害者、視覚障害者のための高等教育機関であることを、社会に広くアピールするための広報手段の一つとして、2012年からつくばエクスプレス線、秋葉原駅及びつくば駅構内にサインボードを掲出しております。

そのうち、秋葉原駅のサインボードにつきまして、掲出場所を出入り口A2の階段踊り場に移動し、併せて、コミュニケーションマークを使用したデザインに一新しました。

今後とも、本学の機能強化の取組として、各種媒体を活用して教育研究や学生活動等の情報を積極的に発信していきたいと思います。

（広報室）

秋葉原駅に掲出したサインボードデザイン

筑波技術大学ニュース　第34号　　発行　筑波技術大学 広報室　　編集　筑波技術大学 総務課
発行日　平成27(2015)年5月　　〒305-8520 茨城県つくば市天久保4丁目3-15　　URL http://www.tsukuba-tech.ac.jp/
E-Mail kouhou@ad.tsukuba-tech.ac.jp　　Tel 029-858-9311　　Fax 029-858-9312